

日本学士院賞 受賞者

杉山正明



専攻学科目 東洋史学

生年月日 昭和二十七年三月一日  
略歴 昭和四九年 三月

京都大学文学部史学科卒業

同 五一年 三月

京都大学大学院文学研究科修士課程修了

同 五四年 四月

京都大学人文科学研究所助手

同 六三年 四月

京都女子大学文学部講師

平成 元年 四月

京都女子大学文学部助教授

同 四年 四月

京都大学文学部助教授

同 七年二月

京都大学文学部教授

同 八年 四月

京都大学大学院文学研究科教授（現在に至る）

同 一八年二月

博士（文学）

## 博士（文学）杉山正明氏の『モンゴル帝国と大元ウルス』に対する授賞審査要旨

本書（京都大学学術出版会、二〇〇四年二月刊）は、一三〜一四世紀に超広域国家として出現したモンゴル帝国の推移について、東西の各地域に遺存する本源史料群を総合吟味することによって、従来不鮮明であった歴史過程の要所を復原することに成功し、「モンゴル時代史」研究の顕著な前進に貢献した労作である。

モンゴル帝国は、その広領域性と分封の政治体制のために、統合かつ集約的な歴史記述が伝世していない。ゆえに全体史を再構成するには、各地域で編まれたモンゴル語、ウイグル語、漢語、ペルシア語、ティベット語などの東西の本源史料群を対照・校訂しつつ前進するという独自の史料学の樹立が求められる。著者はこの研究方法を提唱した故本田実信氏の学統を継承推進し、叙述の周悉と総合的な妥当性において相対的にまさるペルシア語史料群と、次善の漢文史料群との対校を基軸に用いつつ、総合叙述に向けた確たる土台を築くことに全力を傾けた。四部から成る本書は、二〇余年にわたって著した学術論文の集大成であり、モンゴル時代史の研究に飛躍を

もたらす、重要かつ基礎的な学術的貢献を果たしている。

第一部「モンゴル帝国の原像と変容」は、帝国の政治軍事構造の洞察である。チンギスの即位時における、その諸弟・諸子に対する各自《本領》の分封とその地理配置（左翼・中央・右翼）が、帝国の政治軍事組織を律する原理構造となり、以後の領土拡張の戦略とも表裏するという創見を、ペルシア語の『集史』、モンゴル語の『元朝秘史』、漢語の『元史』の徹底した対校を通じて導いている。この構造はやがて、モンゴル高原のほか旧西夏、金、南宋領を直轄した「大元ウルス *Yake Mongyol ulus*」を宗家として、諸子系、西北の「ジョチ・ウルス」、西南の「フレグ・ウルス」、中央アジアの「チャガタイ・ウルス」を連結するゆるい連邦に変容するが、著者はその契機を、クビライの即位（一二六〇）前後の、宗家大カン位をめぐる継承戦争に求め、漢籍に語られざる部分を『集史』などペルシア語史書によって充たしつつ、右翼諸子よりも纏まりを保った左翼の諸弟系勢力との連盟が、クビライの宗家襲封を決定づけた経緯を明証している。

第二部「大元ウルスの首都と諸王領」は、クビライ治下の宗家「大元ウルス」の統治方式の考察である。まず、牧地間の季節移動という原理に相即した、上都（夏都）・大都（冬都）の二都から成る首都圏の構築が、宗家の領土統治において枢軸の役を帯びたことを克

明に論証した。ついで統治方式の具体相を解く鍵として、モンゴル高原の《本領》と旧漢地内の《投下（所領）》との関係性に着目して、山東省内に残る一碑文に刻された政令文を考証し、これがチングスの次弟カサル王家の裔、斉王（山東の王）バブシャの政令を録していることをつきとめ、東西史料を駆使して考察を広げ、左翼カサル家の《本領》と山東にある《投下》領とを結ぶ統治の具体相の復原に成功した。

第三部「大元ウルスと中央アジア」は、「大元ウルス」と諸子系勢力との関係史の復原である。未知の空白が多い「チャガタイ・ウルス」は、北隣する「オゴデイ・ウルス」のカイドウが宗家に反抗した際に加担し、のちに宗家に來投帰附して、幽王（甘粛の王）を授封された。明が興ると、攻撃を受けて哈密に拠って明朝に藩属し、この事情のために漢籍では全体史が辿れない。ところが一五世紀初のタイムール朝の欽定王統史『ムーイツズル・アンサーブ』が、チャガタイ家の裔孫チュベイの王統を掲げ、甘粛の幽王家、敦煌の西寧王家（明代沙州衛の系統）、哈密の威武西寧王家に分枝する一族六世代にわたる系統図が明記されている。著者はこれを復原考察の軸とし、ペルシア語史料、漢文の史書・碑文を併用して考察しつつ、明代の哈密チャガタイ王家の淵源を元代に遡って再現し、この王家がすでに元代において東西に分極する形勢にあったことを究明し

た。

第四部「モンゴル時代をめぐる文献学研究への道——命令文・碑刻・系譜・刊本・写本」は、主として著者の手で開拓して有用性を立証した、本源史料群についての詳考である。碑刻等に録され、一六範疇から成る《命令文》、なかんずく蒙漢対訳のそれを中心に、文体の形式、特質を解析したほか、儒者官人高智耀の漢文伝記を《命令文》と照合し、またコデン（オゴデイ次子）が発した《命令文》碑刻を解析し、さらにコデン家の王統譜を東西史料によって対校して、これらの史料群が高い本源的な価値を備えることを立証している。

本書は、多種・多言語で成る本源史料が広く東西に分布し遺存する状況をふまえ、これらを横断的に動員・照合して確たる史料学を樹立するという難事業に挑み、ペルシア語の史書・王統譜、漢文の碑刻・命令文等を駆使する斬新な研究方法によって、不詳であった重要な歴史経緯を多方面に解明したパイオニアとしての功績は顕著であり、学士院賞に値するものである。

## 主要な著書・論文

### I. 著書

『耶律楚材とその時代』白帝社、平成八年七月

『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、平成一六年二月

## II. 共著

- 『明清時代の政治と社会』「ふたつのチャガタイ家」京都大学人文科学研究所研究班報告書、昭和五八年三月
- 『中国近世の都市と文化』「クビライと大都」京都大学人文科学研究所研究班報告書、昭和五九年三月
- 『清朝治下の民族問題と国際関係』「西夏人儒者高智耀の実像」京都大学人文科学研究所研究班報告書、平成三年三月
- 『宋元時代史の基本問題』「モンゴル時代史研究の現状と課題」汲古書院、平成八年七月
- 『世界歴史大系・中国史3』(愛宕元、梅原郁氏等と共同執筆) 山川出版社、平成九年七月

## III. 論文

- 「モンゴル帝国の原像―チンギス・カンの一族分封をめぐって」『東洋史研究』二七卷一号、昭和五三年六月
- 「幽王チュベイとその系譜―元明史料と『ムイッツブルーアンサーブ』の比較を通じて」『史林』六五卷一号、昭和五七年一月
- 「クビライ政権と東方三王家―鄂州の役前後再論」『東方学報』五四冊、昭和五七年三月
- 「西暦一三二四年前後大元ウルス西境をめぐる小札記」『西南アジア研究』二七号、昭和六二年九月
- 「The 'phags-pa Mongolian inscription of the Buyantu-qaran' s edict in Yuanshu xian 元氏县, belonging to 'C'aga an-balagsun', *Zinbun*, no. 22, 1987.
- 「イスタンブールのヌールIIオスマニイエ所蔵 no.3721 ペルシア語古写本」『史窓』四六号、平成元年三月
- 「草堂寺闍端太子令旨碑の訳注」『史窓』四七号、平成二年三月
- 「元代蒙漢合璧命令文の研究(一)」『内陸アジア言語の研究』V号、平成二年三月

- 「元代蒙漢合璧命令文の研究(二)」『内陸アジア言語の研究』VI号、平成三年三月
- 「東西文献によるコデン王家の系譜」『史窓』四八号、平成三年三月
- 「日本におけるモンゴル時代史研究」『中国史学』一号、平成三年一〇月
- 「八不沙大王の令旨碑より」『東洋史研究』五二卷三号、平成五年一二月
- 「大元ウルスの三大王国―カイシヤンの奪権とその前後―(上)」『京都大学文学部研究紀要』三四号、平成七年三月
- 「New Developments in Mongol Studies: A Brief and Selective Overview」*Journal of Sino-Yuan Studies*, 26, 1996.
- 「日本における遼金元時代史研究」『中国―社会と文化』一二号、平成九年六月